

MG 音を学ぶーバランスのとれた英語力を

高校まで英語ができるということ、英語を上手に日本語に訳せるというのが常識になっています。授業でも試験でも訳ができる人が有利なようです。でも、よく考えてみるとちょっとヘンです。少なくとも、何か大事なことが抜けている感じがする。英語といいながら英語の力そのものではなくて、日本語で訳がうまく書けるかどうか問われている。試験というと試験範囲の訳をマル暗記する、という人が多いのも仕方がないのかもしれませんが。

抜け落ちているのは、音、英語の音声です。だから英語は聞き取れないし、話せないのです。内容も理解していてキチンと訳せる英文も、耳で理解するとなるとお手上げになってしまう。中学生レベルの英語でもオオゴトになりかねません。繰り返し聞いても、わからない。ところが、紙に書いてもらうとわかることが多い。英語の音がないがしろにされすぎたことの結果です。

日本では書き言葉が重要視され、話し言葉によるコミュニケーションは一段低いものと受けとめられがちです。この読み書き重視文化のあおりを受けて、英語の教室でも音声の面が重要視されてこなかったのかもしれませんが。

また、これまで日本の社会では、「英語は訳せばいい」という姿勢でもあまり困ることがなかったというのも事実です。実際に英語を使ってコミュニケーションをするのは一部の例外的な人たちがやることで、ふつうに生活している人間にとっては関係がなかった。でも、時代は変わりました。英語は学校で勉強するだけで十分、それで終わるものと思っていた人たちが、仕事で急に必要になったり、高校時代には思いもつかなかった留学を考えたりする時代になっています。

カタカナ英語からの脱却ー1年目の課題

明治学院大学の英語のプログラムでは、1年次に「英語コミュニケーション1 AB」と「英語コミュニケーション2 AB」の2科目が必修となっています（対象者は、英文学科・国際学部を除く全学科。なお、経済学部生用の同科目は内容が異なります）。読むこと、訳すことに偏りがちな皆さんの英語にさらに英語らしい「音」を加えて、よりバランスのとれた英語力をめざします。要は、カタカナ英語からの脱却です。



カタカナ英語は英語の音声面を大事にしてこなかったことのツケです。こちらは英語のつもりでも、実際はカタカナですから日本語であって英語として受けとってもらえません。

「英語コミュニケーション1 AB」はネイティブ・スピーカーが授業を担当します。英語によるコミュニケーションはどのようにすればよいのか、実際に「聞く・話す」ことを通して学びます。外国人の授業を受けたことのない人には、ひょっとすると、授業に出ることそれ自体が苦行になるかもしれませんが、間違えることを恐れずに、何とか先生とコミュニケーションをとるようにしてみてください。試行錯誤をしながら実際に使うことで身につくこともあるのです。

「英語コミュニケーション2 AB」は日本人講師が日本語を使って行う授業です。英語の発音とリスニングが中心になります。春学期は、日英の音・発音の違いを理解した上で、英語らしい発音を学びます。発音記号にも親しんで、発音のわからない語は自分で辞書を使って調べることができるようになるはず。発音のトレーニングはリスニングのためにも必要なものです。自分で発音できないものを聞き取ることは難しいからです。

秋学期はそのリスニングが中心になります。日本語と違って発声の強弱から生まれる英語のリズム、イントネーション（話すときの抑揚）や息継ぎ、強調の仕方などを学んで、最終的には、少しまとまった話の聞き取りまで進みます。何か、わけのわからない音の流れでしかなかった英語が、意味をもったかたまりの連続として耳に入ってくるようになればしめたものです。

春学期も秋学期も、語彙学習用のテキストを使って意味や使い方があやふやな語句をしっかりと学びなおすと同時に、新しい単語も覚えて語彙力の増強を目差します。

春学期の授業が始まる前に、TOEFL-ITPという世界的に定評のある英語力測定テストを使って習熟度別にクラスを編成します。各クラスの状態に合わせた進捗で、共通のプログラムのもとで、共通のテキストを使って学びます。

成績の評価は、「英語コミュニケーション1 AB」と「英語コミュニケーション2 AB」の両方とも、クラスでの成績が30%、学期末に行われる英語共通テストの成績が70%の割合で計算されます。共通テストにはクラス分けテストのときと同じTOEFL-ITPを使用します。各クラスは習熟度別に編成されていますが、クラスによって予め成績の出し方が決まっているわけではなく、あくまでも一人ひとりの実際の成績によって判断します。したがって、例えば初級レベルの人はどんなに頑張ってもよい成績が取れない、というような心配はまったくありません。

英語で学ぶ—2年目以降の課題

2年生になってさらに英語の勉強を続けたい人たちのために、選択科目として「英語研究1 A」、「英語研究1 B」、「英語研究2 A」、「英語研究2 B」、「英語研究3 A」、「英語研究3 B」があります（各2単位。「英語コミュニケーション」と違って、春学期と秋学期がそれぞれ独立した別個の科目です）。担当者によって授業の内容が異なっていて、映画やアメリカ文化を題材にしたクラス、海外生活に必要な英語を学ぶクラス、速読のクラス、ライティングのクラス等があります。また、TOEFLやTOEIC等、英語力測定テスト対策のためのクラス、留学の準備のためのクラスもあります。

「英語研究」では、「英語を学ぶ」というよりは「英語で学ぶ」ことに重点がおかれています。そのほか、海外からの留学生と一緒に学ぶ授業もあります。この授業の特徴は、なんといっても授業そのものがすべて英語で行われていることです。身につけた英語の運用能力を使って、日本語で行われていてもおかしくない授業を英語で受けてみてください。



なお、2年目以降の科目については、学科により履修できない場合がありますので、入学後の履修ガイド等でご確認ください。

教室外の積み重ね—自律的な学習を

泳ぎ方をいくら頭で理解したとしても、それだけでは実際に海やプールへ行って泳ごうとすると手も足も出ないように、授業を頭で理解しただけでは、「英語の音」が身についたことにはなりません。授業中のトレーニングはもちろん大切ですが、それ以上に、教室で学んだことを自分でやって実際に発音できるように練習を重ねることが肝心です。これを「英語の筋肉をつける練習」と呼んでいます、実際に動かさないと筋肉はつきようがないのです。授業の内容が、そのままその練習のやり方にもなっています。それにしたがって実行してみてください。

明治学院大学の英語は日本でふつうに行われている英語教育とはその理念・目標がずいぶん違ったものになっているかもしれません。高校時代、英語が嫌いだった、苦手だった、という人も新しい外国語を学ぶつもりで授業に参加してください。

